第4回国語教育カフェ・講演録（2010.12.18 マーメイド・カフェ la place）

生命力をもつ文様の伝播

―エジプトのパルメット、中央アジアの鹿角文様と中国の龍、雲気文との関係について―

大形 徹

大阪府立大学の大形徹です。いま私は奈良に住んでいるんですけれども、今日はおみやげを持ってきました。今日の鹿の角の話とも関係あるんですが、このおみやげの包み紙に描かれているキャラクターをご存じですか。これは「せんとくん」ですね。これに対抗して「マントくん」とかいろいろできたんですけれども、「せんとくん」が登場したときにいろいろと叩かれました。なぜ叩かれたかというと、この「せんとくん」のように頭に鹿の角がついたようなものは、仏教的にありえないといって文句が出たんです。私もそのころはそうかなあと思っていたんです。でも、アルタイのスフインクスと呼ばれる図像（図1）をみると、頭についているのは、実は鹿の角なんですね。だから批判されたときに、この作者、これは東京芸大の▲▲さんが作ったものなんですけれども、こういうものがありますよといって、なおかつ、鹿の角は復活再生のシンボルですよ、遷都1300年で、奈良を復活させようと思ってとでもいっていれば、奈良だから鹿の角をのっけたんだろう、という批判をかわせたのではないかと思います。今日は、この鹿の角の話をしたいのですけれども、タイトルは「生命力をもつ文様の伝播」ということで、文様の話を主体にしてお話したいと思っています。副題として、「エジプトのパルメット、中央アジアの鹿角文様と中国の龍、雲気文との関係について」という、ちょっと長いタイトルになっているんですが、そのあたりのことを含めてお話ししたいと思います。

図1 アルタイのスフィンクス

1 神仙思想と仙薬

私はもともと神仙思想を研究しているんですが、仙人になりたいからやっているわけではありません。角川書店から『抱朴子・列仙伝』という本[1]がでているんですが、私は平木康平先生と『列仙伝』という仙人の話の翻訳を担当しました。仙人は七十人くらいいます。そして仙人になる方法で一番たくさん出てくるのは「薬」なんですね。この薬を飲めば仙人になれますよ、というような話が多かったんです。

『神農本草経』という、『本草綱目』のもとになる薬学・薬物の書物があります。この書物は、「上薬」「中薬」「下薬」の三つに分かれているんですね。このうち、「上薬」が仙薬に当たります。「下薬」はというと、例えば風邪薬のような、病気に効く薬なんですね。皆さん、風邪をひいてから風邪薬を飲みますよね。風邪をひかないようにと、毎日、風邪薬を飲んでいる人はいませんよね。なぜ飲まないかというと、薬そのものが体に害を与えてしまうからです。「下薬」というのは結構劇薬なんですね。毒を以て毒を制すといいますが、本来、薬のことを「毒」といい、体に入った毒物を薬という毒でやっつけるという意味でした。では「上薬」はどんな薬かというと、毎日ずっと飲んでいれば聞きますよという薬です。『神農本草経』には、何とかという薬を、久服、つまり久しく服すと長生きしますよと、書いてあるんですね。簡単に言えば養命酒のようなもので、毎日

飲みなさい、というわけです。なぜ毎日飲みなさいというかといえば、どうも薬を売っている人と関係がある。山に入って薬を採って売っている方士と仙人の話が結構重なっているんです。風邪になってから飲むだけよりは、毎日飲んでもらったほうがいいということですね。「久しく服さば」というのも、どれくらい飲めばいいのかが分からないんですね。例えば、どれくらい飲んだら仙人になれると思いますか。(学生:「六十年くらい」)。ちょっと甘いかな。私だったら少なくとも三百年くらいと言いますね。途中で死んでしまえば、久しく服すことが出来なかったという風に言うことができるわけです。それから仙人になる方法としては、一つ面白いものがあるんですね。「尸解仙」というんですけれども、最初のころの仙人には、一旦死んだ人が復活して仙人になる、という方法があります。それを「尸解仙」といいます。そうすると仮に死んでしまったとしても、死んだふりをして、実は仙人になったんだ、というような言い逃れが可能なのです。このように、何とでもなるような言い方で、要するにたくさん薬が売れるというような話です。

『神農本草経』という薬物の書物には、(薬物が) 全部で三百種類以上あり、そのうちの上薬が百二十種類くらいあるんですね。仙薬の種類はものすごくたくさんあるんですが、その仙薬は最初からたくさんではなくて、最初は一つだけだったんですね。その唯一の仙薬というのが、現在、漢方薬屋さんに置いてあるような「霊芝」、「芝」だったんですね。これはいまはキノコです。日本ではマンネンタケとも呼ばれています。私は八月に中国に行き、華山と崇山に登りましたが、そこで売っていた霊芝を買ってきました。漢方薬屋さんや、中国医学ではキノコの霊芝が薬なんですね。ところが、昔の図像を見ていると、必ずしもキノコの形をしていない。それはパルメットと呼ばれる形をしています。パルメットというのは、もともとはエジプトの睡蓮の形から来ているんです。睡蓮のことをヨーロッパではウオーターリリーズといいます。ヨーロッパではブランドのマークにも使われています。こういうマークを見たことがあると思いますが、非常に流布しています。なぜかウオーターが外れて、リリー呼ばれ、日本語ではユリの花と呼ばれています。実際のユリの花は、こんな形ではありませんが、そういう言い方がされています。

このパルメットのに関しては、リイグルという人が『美術様式論　装飾史の基本問題[2]』で、ヨーロッパに流布しているこの文様の系譜を追っているんですね。けれども、リイグルは中国を無視しています。中国に興味がなかったのか、理由はわかりませんが、全く無視されているんです。リイグルの本を翻訳した人は長廣さんといって、中国美術の専門家ですが、中国にもこのパルメット文様があるということをどこにも書いていません。中国美術の人も何もいっていないので、中国には無いと思われていたみたいなんですけれども、よく見たらいっぱいあるんですね。このパルメットの形をしたものが、霊芝の一番最初の形なんです。

後に葛洪の『抱朴子』という仙薬のことを書いた書物のなかで種類が増えてきます。木の「芝」の「木芝」とか、草の「芝」の「草芝」とか、いろいろ分類があります。その中に、肉の「芝」の「肉芝」というものがあります。それは何かというと千年生きた蛙とか、千年生きた燕みたいなものがそうなんですね。そういう長生きしたものを食べると長生きできるという発想になっているんですが、そのうちの一つが「菌芝」と呼ばれて、キノコの「芝」なんですね。実際に、霊芝つまりマンネンタケいうキノコは、プラスチックみたいで、カンカンと叩けば、コンコンと音がするような具合にカラカラに乾いているんですね。腐らないで、いつまで経ってもそのままの形でずっと残っているから、仙薬とされているのでしょうが、最初の段階ではそうではないんですね。

2　霊芝とパルメット文様

その仙薬の「芝」のことをずっと私は調べていたのですが、あるとき研究会で考古学の先生から、「霊芝」について何か文章を書いてくださいといわれ、調べて書き始めました。それで、だいたい原稿はできたんですけれども、なんかしっくりこないんですよ。文献に書いてあることをまとめたら、それなりの結論は出てくるん

です。出てくるんですけども、なんかぴんと来ない。なぜぴんと来ないかというと、要するにパルメットの形なんですね。これはパルメット文様と呼ばれていて、鏡のことや画像石のことを研究している人なんかもパルメットだと言うんですが、そのパルメットが何であるかはこれ以上は詮索しないなどと書いてあって、そこで調べることを放棄しているんです。それで今度は自分でパルメットの源流を探っていくと、エジプトの睡蓮に行き着きました。この睡蓮というのは、睡眠の「睡」に「蓮」と書きます。いま我が家でも睡蓮を育てているんですけれども、睡蓮の花は、夜になると花が閉じて花全体が水の中に少し没します。完全に沈むものもあるのかもしれません。それが、翌朝になって太陽が昇ると、また水から顔を出して花が開きます。三日間くらいそれが続きます。いったん眠ったものがまた目覚める、つまり、死んだものが、また復活するというイメージです。エジプトでは太陽と睡蓮の形、睡蓮のそういう性質が重ね合わされてゆくんですね。太陽も同じことなんですけれども、沈んだ太陽がまた翌朝出てくるということで、睡蓮の花から太陽が生み出されるみたいな話になってくる。エジプトは太陽信仰が有名です。最初からそうではなくて、途中からそうなってくるんですけれども、そのときに太陽の復活・再生と睡蓮、それからエジプトでは死者をミイラにするわけですけど、ミイラになった人がもう一度、どこかに復活・再生するみたいな話が重ね合わされてゆく。その辺の宗教的観念や思想が、どうも中国の霊芝や、いったん死んでから復活する仙人である尸解仙とも関係があるんじゃないかと思いました。そして図像によって、そのことが証明できないか、ということで調べ始めたのです。

最初そういう話を、一緒に研究している土屋さんという専修大学の先生がいらっしゃるんですが、――実は神仙思想を研究しているなかで、多分私は三本の指に入るんじゃないかと。というのは神仙思想を研究しているのは、私と土屋さんくらいしかいない。三本で指がまだ一本余っているんです。仙人の話というのは誰でも知っているんですが、そればっかりを研究している人というのは、意外といないんですよね。――その土屋さんにそういう話をしたら、土屋さんはエジプトの話と中国を結びつけるのは無理でしょう、と仰っていました。その年に大阪で開かれた道教学会[3]でそのあたりの話をしました。そのときには、結構反響が大きくて質問者が続出でした。ふつう学会では、あまり誰も質問しなくて、司会者が誰かに当てたりするんですけれども、手を挙げる人がいっぱいいて困ったくらい、質問が殺到したんです。形の類似から、ある程度、納得できたからではないかと思うんです。その辺りから私の考え方が変わってきました。もともと文献の調査をしている人は、文献の中で証明しようとするんですけれども、美術をやっている人は文章の説明はこじつけに過ぎないといます。それで文章に対しては、あまり重きを置いていません。外国から図像が入ってくるときに、先に図だけが入ってきて説明は後になる。言葉は難しいので、文章を読んだり、聞いたりして理解するというのはなかなか大変です。私なんかは、中国語だけでも大変なのに、もっと西のほうの国のいろんな国の言葉なんて分かるはずがない。恐らく商人なんかを通じて入ってきているんだろうと思いますが、最初に図像が入ってきて、後でいろいろと説明され、だんだん説明が増えていくようなことになっていたのではないかと思います。そういう視点でいろんなものを見てきたときに、今までとは違うものが見えるんじゃないかと思います。

最初はそういう形で、神仙思想の仙薬の原点の「芝」は何かと考えていました。エジプト的なパルメット文様が先に中国に入ってきてというふうに。では、その目的、意味はというと、復活再生ということなんですね。それが中国ではさきほどちょっとご紹介したように、尸解仙のような復活再生の力をもっている仙人とか、あるいはお墓のなかに入ったあと、あの世に行くというのも、ある種あの世に復活する、あの世に再生するということですから、まさにそのために図像や文様が使われているのではないかと考えています。これが最近ずっとやっている研究の基本になっています。その辺のことを、少し図像を見ながらお話ししていきたいと思います。

3　馬王堆の帛画とエジプトの図像

図2は馬王堆の帛画と呼ばれているものです。これは一号漢墓の帛画で、真ん中にいるのが、前漢初期の文帝の時くらいの女性です。馬王堆というお墓の被葬者なんですけれども、被葬者が真ん中にいて、下の方が地下世界になっていて、上のほうが天界になっています。それは被葬者が昇仙していくことを示していて、京都大学にいらっしゃった曽布川寛先生が『崑崙山への昇仙』[4]という本のなかで、その辺のことを詳しくお話しされています。

上を見ると、太陽と月があります。太陽の中には八咫烏という三本足の烏がいるといわれています（図3）。左側のほうには三日月があって、蛙と兎がいるといわれています（図4）。この形によく似たものが、図5のところに入っている、これです。完全に同じではありませんけれども、この上の方に舟があって太陽があります。これは右も左も両方とも太陽なんですよね。その太陽を舟が運んでいる。これはエジプトの思想なんですけれども、太陽は空を航行しているんですが、そのときに舟に載って運ばれる。エジプトでは葦船なんですね。植物を編んで作る舟なんですが、その形がちょうど三日月の形みたいになっている。そのことから月もまた舟であり、そこに太陽が載っています。エジプトの場合は天界と地界をぐるりと循環している感じなんですね。この月の舟がずうっと地界に潜って、今度は地界からまた太陽が昇ってくる。そのような循環を繰り返しています。エジプトの場合だと、恐らくナイル川なんでしょうが、水の中から太陽が出てくると言うことになっているんですね。そして、さきほどのパルメットの睡蓮から太陽が咲くみたいな話になってきます。少し話が飛びますけれども、この話は中国の扶桑の話とよく似ているんですね。扶桑は日本をさすことがあります。日本の正式名称では無いんですけれども、六朝時代の中国に行った人が日本のことを扶桑と言っているんですね。扶桑は中国の東の方に生えている神木で、そして沈んだ太陽がいったん水の中に潜ったあと、扶桑の木を昇り、その枝の先の花から太陽が咲き、それが天空を昇って太陽となるという話があります。これはさきほどのエジプトの話によく似ています。

馬王堆の帛画の、太陽の中の鳥は、カラスとみなされています。これは八咫烏という三本足の烏で、日本サッカー協会のシンボルとなっています。でも馬王堆の帛画の中の鳥は二本しか足がありません。また、これは本来、カラスではない可能性があります。この鳥はエジプトの太陽の中にいる鳥の図像と形がよく似ています。エジプトでは、この鳥は烏ではなく、ハヤブサです。

これは太陽の中にハヤブサがいるかたちです(図6)。ハヤブサというのは、オシリスというエジプトの神をあらわすとされているんですが、殺されたオシリスが、ハヤブサの形をとって、どうも太陽の中に入って復活するようなことがいわれているんですね。どうもこの辺は図像的に見てもよく似ています。

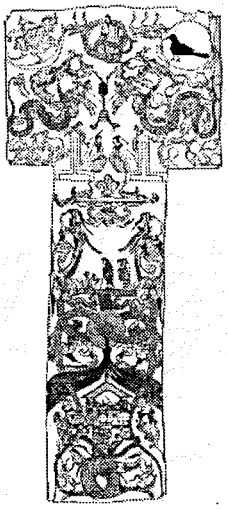

図2　馬王堆1号漢墓の帛画

図3　太陽と烏

図4　三日月と蟾蜍と兎

図5　エジプトのミイラの包み布

それからエジプトには人面鳥（図7）がいます。エジプトでは魂のことを、バーとかカーとか言うんですが、バーやカーによく似た人面鳥が、やはり馬王堆の帛画の真ん中あたりに出てくるんですね（図8）。それから楚帛画の横にいる鳥の形（図9）はエジプトの舟に載っている鳥（図10）とよく似ています。恐らく鷺の類だと思うんですけれども、これはエジプトではフェニックスと呼ばれています。これは不死鳥ですが、中国では鳳凰になるのかも知れません。

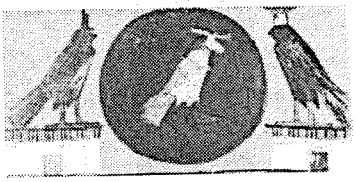

図6　太陽の中のハヤブサ

図7　人面鳥バー

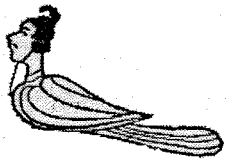

図8　帛画の人面鳥

図9　楚帛画の鳥

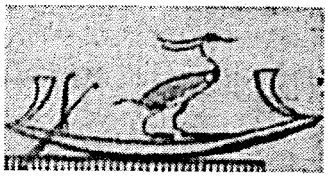

図10　ヘリオポリス聖鳥フェニックス

4　『荘子』内篇と馬王堆の帛画

『荘子』内篇の最初の篇が逍遙遊篇です。この篇の冒頭の話が、「鯤」という魚が「鵬」という大きな鳥に変化して飛んでゆく有名な話です。その話とどうもこの馬王堆や楚の帛画が関係あるんじゃないかと思います。逍遙遊篇のなかに「扶揺」という言葉が出てきます。「扶揺を搏ちて上ること九万里」とあるのですが、大きな魚が大きな鳥に変化して、「扶揺」という、つむじ風に羽ばたいて上まであがっていくという話です。いろんな注釈を見ても、ほとんどその解釈です。けれども、実は外篇在宥の中に「扶揺之枝」という言葉が出てきて、そこでは「枝」となっている。だから、そこでは樹木なんです。外篇にみえる語は、『荘子』内篇にみえる語の語釈として利用できるのではないかと思います。そこで今度は外篇の『釈文』の李の注釈を見ると「神木なり、東海に生ず」とあり、それは「扶桑」につながってきます。

『荘子』内篇の最初の話は、馬王堆帛画に描かれているものと非常によく似ています。魚が鵬になって空を飛んでいく話ですが、逍遙遊篇の「鯤」というのは、応帝王篇の「渾(混)沌」とよく似ています。その「渾沌」は『山海経』西山経の「渾敦として面目無し」の「帝江」につながってきます。「神がいる。黄いろい袋みたいで、丹や火のように赤く、六足四翼で、渾敦として目も鼻もない。これは歌って踊る。まことに帝江である」とされています。この「渾敦(帝江)」には翼がります。またその色は黄や赤です。『春秋左氏伝』文公十八年では、「帝鴻氏には不才の子がいて、天下の人々はこれを渾沌という」と「帝江」は「帝鴻」で、その子が「渾沌」とされています。そして杜預の注は「帝鴻は黄帝」です。鐵井慶紀氏は、「黄帝伝説について[5]」で、「黄帝」は上帝であり、そして太陽神であると、おっしゃっています。先にみた在宥篇では「扶搖の枝を過(よぎ)りて適きて鴻蒙に遭う」と、「鴻蒙」という人物がでてきますが、「鴻蒙」もまた「帝鴻(帝江)」であり、「黄帝」であり、太陽神ではないかと思います。そうすると「扶搖の枝」はまさに「扶桑」で、「鴻蒙」は枝から生み出されている太陽であったとわかります。さらに「鴻」は「おおとり」であるため、『荘子』の「鵬」に通じていることにも気づきます[6]。

要するに色々と辿っていくと、『荘子』にみえる鯤や鵬は、黄帝と同じだということになります。中国で黄色というと大地の色、黄土色、あるいは黄河の黄と思ってしまいます。でも、それとは別に黄帝が太陽神だと

いうような説があって、その説を適用すれば、鯤自体がもしかしたら太陽かもしれない。そうすると、鯤という太陽が海から空に上って鵬という太陽になって、ということになります。オリエントの方には有翼太陽とかいって、太陽に羽がついた図が結構たくさんあります。要するに太陽が空を飛ぶというのは、羽があるからということで、鳥と太陽も関係があるかもしれません。

その辺りのことを『荘子』の死生観の問題としてとらえられるのではないかと思っています。『荘子』逍遙遊篇の話は「北冥に魚有り」という所から始まって、その魚が鵬に変化して、飛んでゆく先が「南冥」という所なんですね。北と南、そこから始まっているんです。そして『荘子』内篇の一番最後の話は「渾沌」の話です。「渾沌」の話は北海の帝を「儵」、南海の帝を「忽」、中央の帝を「渾沌」といいます。「渾沌」というのはのっぺらぼうなんです。目も鼻も口もない。北海の帝と南海の帝は、そののっぺらぼうの「渾沌」が可哀想だと思って、毎日一個ずつ穴を空けていって、七日目で穴が全部空いた。そしてその七日目に渾沌死すと「死ぬ」で終わっているんです。つまり、『荘子』内篇の一番最後の話が「死ぬ」で終わっているんです。そうすると『荘子』内篇の一番最初の話は「生まれる」でなければならないはずです。先にみたように鯤が鵬に変化する話は、海から出た太陽が空高く上るという話に重ねあわされますが、太陽は沈んだ太陽がまた昇るという循環を繰り返しています。これは輪廻転生のような死生観と重ねあわされますが、そういう感じで輪廻転生みたいなことで『荘子』を捉えている人が、昔の立命館大学の先生[7]でいらっしゃるんですけれども、仏教というのはまだ伝わっていないので、仏教の影響ではありません。それは儒教の祖霊観念とも全く違います。祖霊観念だと生まれ変わりません。生まれ変わらないからこそ、祖先の魂が我々を見守ってくれる。亡くなってすぐに生まれ変わったら祖先の魂なんかありませんから、祖霊信仰というのが出てこなくなるんですね。

5　パルメットと鹿の角の文様[8]

それでは、パルメットの例を見ていきましょう。パルメットは例えばこれ（図 11）がそうなんですね。右側にいるのが羽人なんですが、髪の毛の後ろがひゅっと伸びているんですね。手に持っているのがパルメットです。左側は画像石なんですけれども、これは兔です。兔が杵を搗いていて、日本では餅つきということになっています。でも中国では兔が薬を搗くということになっており、仙薬としての薬を西王母なんかに差し上げる為に作るというような話になっています。その右側の羽人が手に持っているものが、まさにパルメットの形で、足で踏んでいるものもパルメットの形なんですね。これを中国の画像石の紹介者は「芝草」と言ったりしています。

図 11　羽人と兔

これは「雲気文」と呼ばれるもので、京都大学の曽布川寛先生なんかが仰っているものです。さきほどの馬王堆の下の方に亀がおり、上の方のお月さんの上には蛙がいます(図 12)。これらの口に銜えているものが雲気だといわれています。いわれているんですけれども、亀は地下に描かれているんで、雲気ではないと私は思っています。「口に雲気を銜えた亀[9]」が二組配されていますが、雲をつかむような話というたとえがあるように、つかめないような雲が銜えられるはずもないですよね。人によっては、これはジェット気流みたいに吹き出しているんじゃないかというように言う人もいるんですが、亀の方をよく見ると口の端から雲気の端っこが逆のほうに出てきていますので、やっぱり銜え

図 12　地底の亀と月上の蟾蜍が銜える雲気

ているんだというようなことになるんですね。ですから、そもそも雲気が銜えられるというのはおかしいんじゃないかということです。

それから次の図（図13）を見て頂くとですね。龍のしっぽのところに先程紹介したパルメットみたいなものがついているんですね。これをパルメットとは曽布川先生はおっしゃっていません。「蕚」というふうにいっています。花の蕚ですね。何か花のようなものと仰ってるんですが、なぜそれがついているのかということは仰っておられません。

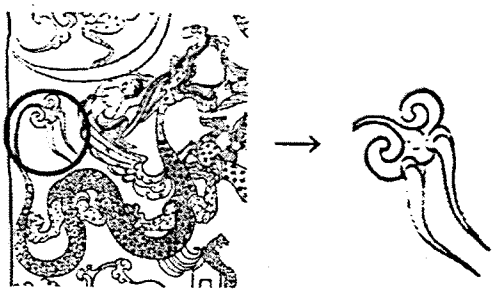

図13　龍と尻尾の蕚（パルメット）

私はこの「雲気」とか呼ばれているものが、もともと鹿の角の形ではないかと思っています。ただ鹿の角といっても、中国の鹿というよりは北や西の方の鹿、トナカイよりも大きな鹿がいるんですが、その鹿をヘラジカとオオツノジカと呼びます。この図（図14）なんかが分かりやすい。角は本当はこんなに大きくはありません。でも、この三分の一くらいの大きさはあるんじゃないかという角が生えています。奈良の鹿だと、だいたい四年で鹿の角は完成します。鹿の角というのは毎年落ちるんです。角を切ってますけれども、あれは落ちて誰かに拾われるから先に切っておこうということではないかと思いますが、毎年、落ちて、新しく生えかわるんですね。一年目は小さくて、二年目は少し大きくなって、三年目がもう少し大きくなって、四年目が完成形です。毎年落ちて生えかわるということで、結局、これは復活再生のシンボルということになります。奈良の鹿がそうで、他のがどうなのかということは、きちんと調べていないのですが、やはり角は落ちるんだと思います。そういうことはスキタイの研究をされている林俊夫さんも仰っています。

図14　角が大きく成長したオオツノジカの彫刻

その鹿の角の形と、下に書いてあるのはエジプトのパルメット文様ですね。図15が角の文様とパルメットの花。これは中央アジアのパジリクにあるお墓の中から出てきたフェルトです。フェルトというのは不織布です。繊維を和紙を漉くみたいにからませて作るんですが、そのフェルトにアップリケをしています。アップリケというのは最近のものかと思ったら、昔からあるんですね。そのアップリケの左側のほうがヘラジカなどの角の形で、右側がパルメットだろうと思います。それが連続してあらわれている。この二つが、くっつくんですね。それが図16です。これはパジリクのほうにある被葬者の体に入れ墨された模様です。ここもミイラみたいなのが残っているんですが、ミイラの作り方がエジプトとは違うんですよね。どうも皮だけ残して、筋肉とか内臓とか全部取ってしまって中におがくずみたいな植物とかをつめているんで、簡単に言えばぬいぐるみをつくっているんですね。中にはそういうものを詰めているんですけれども、ミイラを作ること自体やっぱり形を残すということですから、どこかで復活

図15　角の模様とパルメットの花

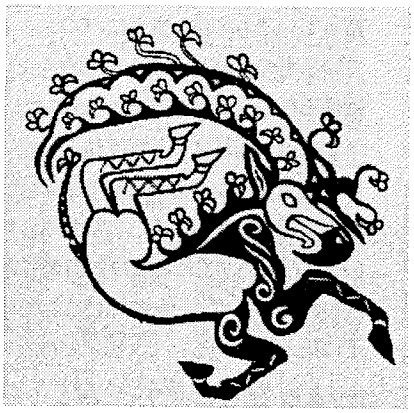

図15　枝角の先端に咲くパルメット

再生するんじゃないかということを願っているんじゃないかと思います。ミイラで皮が残っていた人の入れ墨が残っていた。何故、残っていたかというと中央アジアあたりのお墓が、作ってまもなく盗掘された。盗掘するときには上から掘るんです。穴掘って盗掘して、その後、雨がざぁと降って、それからすぐに冬になり、全部凍っちゃったんですね。お墓の中が水浸しになって、そのあと氷の塊みたいになったまま、ずっと残っていた。それが発掘されて、ふつうだったら腐ってしまうものが冷凍保存されたんですね。そういう形で出てきた人間の皮膚に書かれた入れ墨なんですが、この鹿の角の形を見て頂いたら分かるように、一つは角にパルメットが咲いている。角だけじゃなくて、右の方の鹿は尻尾にもパルメットが咲いています。この尻尾に咲いているパルメットというのが、先の馬王堆の龍の尻尾のパルメットと、おそらく、同じです。

6　中央アジアの文様と中国

鹿の顔は、鹿の顔ではなくなっています。これはグリフォンという合成動物がいるんですが、ライオンと鷹との合成動物の場合は、顔が鷹になって体がライオンになるんです。この鹿の頭はグリフォンの頭みたいになっています。またこの鹿の下半身は１８０度回転しているんです。図17を見てください。これは馬王堆の棺桶に描かれているものですが、これは鹿ですね。角があります。その下半身が、180 度回転しています。ただこれを研究している曽布川先生は、これは馬だというんです。角みたいに見えるのはたてがみだと仰っています。でも、鹿と馬はひづめの形が違っているんですね。偶蹄目、奇蹄目というのがあって、馬は奇蹄目、ひづめが分かれていません。鹿は分かれている。それから尻尾の長さが違います。鹿は目印になるように白い尻尾を後ろに立てているんで、尻尾は小さい。馬は長いんですね。これは馬ではなくて鹿でしょうね。それで曽布川先生はこれは馬が溺れようとしているところだというふうに仰っていて、それは崑崙山の話と弱水という川とひっかけて、ここで「さんずい偏」をつけて溺れるみたいな話にされています。さきほどみたように中央アジアには似たような形のものがいっぱいあるので、図像的にはその影響でしょう。

図 17 馬王堆の下半身が 180 度回転して跳ね上がる鹿

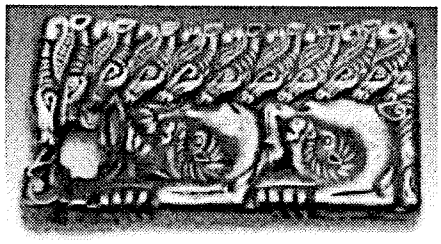

図 18　湖北省の下半身が 180 度回転して跳ね上がる羊

図 18 は鹿ではなくて羊なんですけれども、やっぱりひっくりかえるような形をしています。スキタイの研究をされている林俊男先生は、これは動物闘争文の名残りだろうといっています。動物闘争文というのは、動物同士が組み合っている形ですけれども、動物が二頭で一組だったものの、一頭だけを残して描いたら、こうなるんだという考察をされています。私もそうだろうと思います。

図 19 黄金の騎士と馬

図-20　黄金の騎士と馬（拡大）

この角とパルメットの組み合わせ、或いは 180 度下半身が回転した動物の形みたいなものが、馬王堆の文様のなかにも出てきているんではないかという話です。これは馬なんですけれども鹿の角をつけているんですね。これはパジリクといって中央アジアのほうなんですけれど

も、葬列に使う馬に作り物の鹿の角をつけているんだろうと林俊男先生は仰ってまして、それはやっぱり復活再生観念と関係があるんだろう、被葬者があの世で復活するためにわざわざ角をつけたんだろうということを仰ってますね。

それで図19・20なんですけれども、これは雲南省の話です。話がちょっと飛ぶんですが、馬に乗った黄金の騎士が出てきます。雲南省というのは中国の南のほうなんですけれども、その雲南省に出てくるようなものが、アッシリアとかと関係があると書いている中国の学者がいます。これも距離的にはかなり離れているんですが、出てくるものを見たらよく似ているとか書かれています。私が考えていることの補強になるような話なんですね。

中国の場合には、あまり外から入ってきているものを宣伝しない傾向がありました。何でも中国が最初だということが多かったんですけれども、実は必ずしもそうではありません。中国では火薬、羅針盤、活版印刷を三大発明といっています。そのこと自体、疑問視されていますが、かりにそうだとしても、逆に言えば、それ以外のものはみな外国から入ってきているということになります。例えば青銅器の青銅とかはよそから入ってきたんですね。でも中国に入って来て、それが技術力によって、本来のものよりもすごいものになっていくということで、元から中国にあったように思ってしまうんですね。私自身も昔はそう思っていましたけれども、今は必ずしもそうではないと思ってます。

7　パジリクの女神と騎士、エジプトの女神イシス

図21と図22の女神と騎士の図像は連続している文様で、左側が女神といわれています。髪の毛は無いのですけれども女の人といわれており、椅子に座っています。右側の馬に乗っている騎士が被葬者だといわれています。一般的には、女神が騎士に生命樹みたいなものを渡しているところとか、あるいは王権の象徴となる生命樹を与えているとかいわれています。けれども、私はどうもそうじゃないと思っています。やはり復活再生のシンボルみたいなものを渡しているんじゃないかと思います。女神が手に持っているものというのは樹木の形をしていますが、これはやはり鹿の角の形ではないかなと思います。そこに咲いている花みたいなものがパルメットの変形で、鹿の角とパルメットを合成したものを渡している。それによって被葬者があの世で復活再生するみたいなことになるのではないかと考えています。

図21　女神

図22　騎士

図23と図24は、イシスと呼ばれるエジプトの女神です。イシスは子どもを抱いていることが多くて、図23なんかはまさにそうですが、聖母マリアの原形というふうにいわれています。イシスの夫のオシリスが殺され、バラバラにされてしまうんですが、それを繋ぎ合わせてミイラにして復活させるということをイシスはしたので、ついに復活再生の女神ということになります。イシスは椅子に座っていることが多いのですが、中央アジアのパジリクの女神もやはり椅子に座っているんですね。文献がありませんから、どう関係があるのかは分

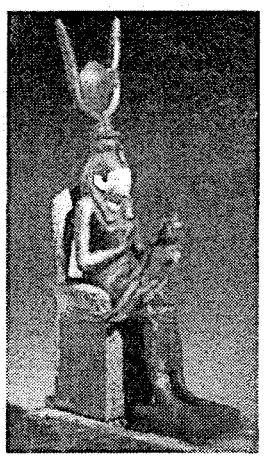

図23 座席に座るイシス

図24　頭上に座席を載せるイシス

かりませんが、よく似ています。いずれも墓にあるということで、やはり関係があるのではないかと思います。図24のほうは頭の上に置いているのが椅子です。椅子のことを玉座といったりしますが、椅子自体がイシスの象徴のようになっていて、ヒエログリフのなかでは、それだけでイシスを指すともいわれています。

8　アルタイのスフィンクス

図25をご覧ください。これは最初に紹介したアルタイのスフィンクスです。スフィンクスの尻尾の方もそうなんですけれども、頭につけている角とそこに咲いている花は馬王堆にみえる茱萸文とと似ていると思いませんか。それと馬王堆の扶桑、これは太陽がその花から生まれるとされているんですが、それともよく似ています。似たような文様は図26〜32にもあります。その形は図25のスフィンクスの形、文様とよく似ているんですね。図31・32は、現代の人がつけた名前でしょうけれども、「乗雲綉」とかいって、雲気文の一種だとみなされているわけです。けれども、もともとパルメットと角の形から来ているのではないかと思います。

図25　アルタイのスフィンクス

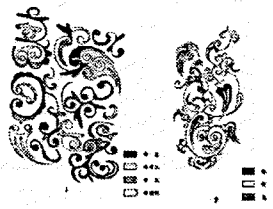

図26　信期綉　図27　信期綉

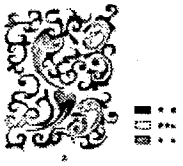

図28　信期綉

図29　長寿綉

図30　長寿綉

図33から図38まではアルタイのスフィンクスの髪型ですけれども、髪の後ろがくりっと巻いているんですね。さきほどの鳥の図の頭の羽のところもよく似ているし、それからエジプトの子どももそうなんですね。中国の羽人も似たような形をしています。何か関係があると思います。子どもがこの髪型をするというのは、やはり特殊な意味があって、復活再生と関係があったようです。そのあたりのつながりで、スフィンクスと羽人というのは似ていると思います。羽が生えていることも似ているし、図38の羽人は大鳥の上に乗っているんですけれども、その足の部分が鱗状になっていて、鳥の足になっているんですね。羽人なんだから鳥で当たり前なんですけれども。

図31　乗雲綉

図32　乗雲綉

図33 スフィンクス

図34　エジプトの子供

図35　羽人

図36　羽人

図37　羽人

図38　羽人

エジプトにいるスフィンクスが、地面に伏しているため、そういうものばかりだと思われるかもしれませんが、図40のように立っているスフィンクスもいるんです。他にスフィンクスではギリシャ神話だったと思いますが、謎かけをする怪獣として出てきます。そこでは怪獣扱いされ

ているんですが、もともとは色々なものの良いところ取りをしたものではないかと思います。さきほどのグリフォンも同じですが、羽が生えているから飛べますし、ライオンの形をしているから力が強いとか、長所を取り入れた形です。またそういう色々な禽獣のパーツを合成した、合成動物なんですが、妖怪みたいなイメージをもつかもしれません。けれども、当初作られたときは、いろんなものの長所を取り入れて、長所だけを合体させた別なものを作って、それを理想形としたというようなことがあったんじゃないかと思います。そう考えてみたときに、女神が騎士にパルメットのついた角を渡していますよね。そうすると騎士はもしかしたら頭に角をつけてスフィンクスになるのかもしれない。図41と図42は入れ墨の文様を図に描いたものと写真にとったものです。そこには、いろんなものが描かれていますが、鹿の角とパルメットの合わさったものも描かれています。復活再生の生命力のイメージをあらわしていますが、死んでから後に、そういうものに変化するというようなイメージが、あるのかもしれません。

図39　スフィンクス

図40　スフィンクス

図41　ライオン？の入れ墨

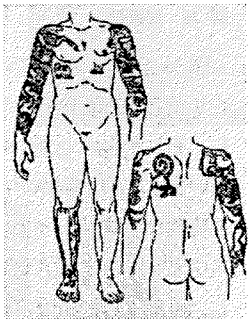

図42　スキタイ文様の入れ墨

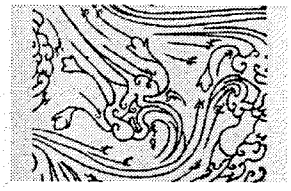

図43 雲気文とパルメット

9　パルメット、鹿の角と龍、雲気文との関係

図43をご覧ください。これも馬王堆の棺に描かれている絵なんですけれども、いわゆる雲気文と呼ばれる形からパルメットの花が咲いているような図なんですね。雲気文の形は、私は角の形に基づくのであろうと思ってるんですけれども、これはかなり変形しています。そこにパルメットの花が咲いているという形になっています。こういうものは中国の南北朝時代になってもまだ出てくるんですが、文様の研究者は、パルメットと雲気という無関係の文様が混淆しているという言い方をしています。混淆というのは、意味なく交じりあってる状況です。けれども、私は意味なく混じり合っているわけではないと考えています。文様の場合には「宝づくし」という発想があります。わかりやすいのは松竹梅とか鶴亀でしょう。あれは良いものを合わせることによって、より力を強めるというような発想があると思います。ここの場合もパルメットと雲気といってしまえば、何も関係ないと思ってしまうかもしれませんが、どちらも復活再生の力を持っているということで、それを合わせたものになるのではないか。パルメットはさきほどの龍の尻尾にもついているんですけれども、龍の体の一部分も雲気になってますね。それが図44から図46です。龍というのはよく雲の中から顔を出すような描かれ方をしています。後の時代はみなそのような感じになっているんですが、初めの頃に描かれている龍は体の一部が雲気文になっているんですね。龍と雲気が合体しているんです。そのことは誰も指摘していないように思います。先ほどの尻尾からパルメットの花が咲いているのと同じですけれども、龍に雲気文が合体して、さらにパルメットも合体しているようなことに中国ではなっています。龍は中央アジアやエジプトにはいませんから、そこではそういう形にはなっていないんですけれども、中国に入ってから変化しているということですね。雲気文については図47の金銀象嵌金具とか、その辺りに使われているものがそうです。これは雲気文だけしか描かれていません。また雲気文と呼んではいますが、本当に雲気を描いて、こうなったとは思えません。

図48をご覧ください。これは清朝あたりの道教関係の絵の一部分です。図の真ん中の下の辺りに龍の顔があります。上のほうにも龍の顔が出ています。雲の中から龍が出てくるんですが、この場合の雲気文は、初期の頃のカエルがくわえていたようなものとは、かなり違ってきて、本当の雲らしくなっています。雲気文というのは文献の中にもでてきます。かなり早い時期から龍と雲が一緒になって出てきます。そのため、雲気文だ雲気文だといわれ続けているうちに本当に雲になってしまったと思うんです。雲気文を現代から遡って辿っていけばカエルや金銀象嵌金具に行き着くので、これが雲気文の原形だというふうに結論づけてしまうのは、ある意味当たり前かもしれないんですけれども、実はそうではないということです。

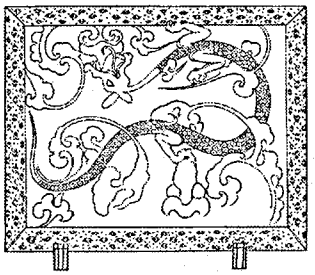

図44 漆屏風

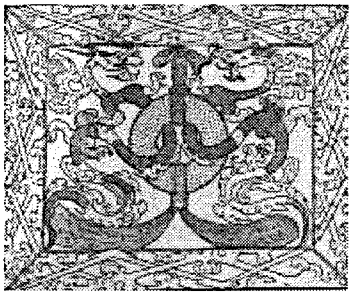

図45 朱地彩絵棺飾

林俊男先生はパルメット文様のことには言及されていません。けれども、エジプトから他の地域を経由してパルメットが中央アジアに入ってきたときに、中央アジアではその復活再生の生命力という意味を理解し、消化した上で、同じような復活再生の力をもつ鹿の角と習合させて、鹿の角と合体させた文様を作り出しています。パルメットはその後、中央アジアを経由して中国にも入ってきますが、その時に、さらにに龍と合体化するものもありました。それが、龍の体の一部に鹿の角にもとづく雲気がくっつき、なおかつ龍の尻尾にパルメットが咲いている図像ではないかと思います。龍は、魂を天界に運ぶもので、のちには神仙の乗り物になり、やはり、再生復活観念てと深く関わっています。文様はそれ自体が、変化しつつ増殖していきますが、中国に入ってさらに変化し、また龍と重ね合わせることで、さらに強力になっているような気がするんですね。そのときに混淆しているというように捉えてしまうと全く意味がなくなってしまいます。ぱっと見たときには、全く関係が無いと思うかもしれません。でも、いろんな要素が混じっていて、それは先ほど言ったような宝づくしなんかと同じで、目出度いものを重ね合わせる考え方があるんじゃないかと思います。いわゆる雲気文と呼ばれるものは、実はもともとは雲気ではなくて鹿の角にもとづく復活再生の力を持っている。そういうものをお墓に描くのはある意味、当たり前なんですね。被葬者があの世で復活再生できるようにと願い、それらの文様で、あちらこちらを埋め尽くしたのではないでしょうか。

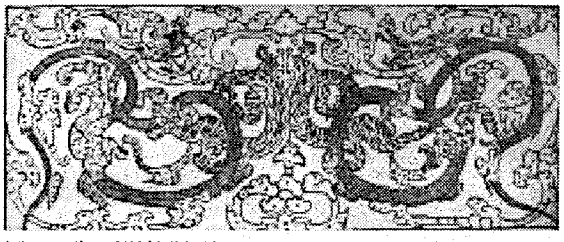

図46 朱地彩絵棺蓋板紋飾

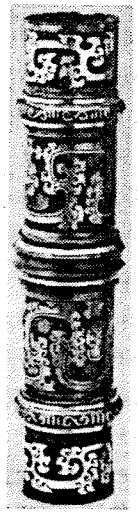

図47 金銀象嵌金具

図48 清、普化天尊像の龍と雲気

【注】

[1] 小川環樹・本田済監修　尾崎正治 ・大形徹・平木康平著『抱朴子・列仙伝』(鑑賞中国の古典第9巻) 角川書店、1988

[2] アロイス・リイグル著・長廣敏雄訳『美術様式論：装飾史の基本問題』座右賞刊行會、1942

[3] 日本道教学会2006年第57回大会発表題目「「芝」とは何か―パルメット文様の考察を通して―」、「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について―馬王堆帛画を例として」東方宗教第１１０号　日本道教学会。

[4] 『崑崙山への昇仙　古代中国人が描いた死後の世界』中公新書、1981

[5] 『中国神話の文化人類学的研究』、平河出版社、一九九〇。

[6] 拙稿「『荘子』逍遥遊篇冒頭の話と馬王堆帛画―魚・鳥・太陽・扶桑をめぐって―」郵政考古紀要、第50号、佐藤武敏先生頌壽記念論稿、大阪・郵政考古学会、2010年を参照。

[7] 笠原仲二「『荘子』に現はれた死生観」立命館文学114に、「輪廻回帰の思想」とみえる。

[8] 2010年5月22日、大阪府立大学中之島サテライトで開かれた「形の文化会」で発表後、「雲気文と鹿の角」として、「形の文化研究」６号、2011年3月に掲載。

[9] 「口に雲気を銜えた亀」曽布川寛『中国美術の図像と様式　研究篇』Ⅰ古代美術の図像学的研究　二　崑崙山と昇仙図　中央公論出版社、2006年、92頁。

【図版典拠】

図１　アルタイのスフィンクス：『西域の秘宝を求めて』加藤九祚、時代社、1969年、7頁、パジリク古墳の秘宝、第五號出土のアプリケ。

図２　馬王堆1号漢墓の帛画：『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、1973年。

図３　太陽と烏：『長沙馬王堆一號漢墓』平凡社、1973年。

図４　三日月と蟾蜍と兎：同上。

図５　エジプトのミイラの包み布：ドイツ民主共和国ベルリン国立博物館(ボーデ博物館)蔵/東京国立博物館[ほか]編、『大エジプト展』、187頁に圖、二七四頁に解説、ミイラの包布　亜麻布、彩色縦97.5cm 横93.5cm グレコ・ローマ時代、紀元前4―後4世紀　出土地不明。

図６　太陽の中のハヤブサ：魂を迎える２女神、解説９９第19王朝B.C.1205年頃石灰岩漆喰地彩色テーベ（王陵の谷）シプタハ王墓、杉勇責任編集『世界の美術』第３巻エジプト美術、学習研究社、1972年。

図７　人面鳥バー：『世界美術大全集　第２巻　エジプト』小学館、1998年、イリネフェルの墓壁画、バーと影、新王国、第20王朝　前掲1170年頃。

図８　帛画の人面鳥：『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、1973年。

図９　ヘリオポリス聖鳥フェニックス：ヘリオポリス聖鳥フェニックス、紀元前 4-1 世紀、『死者の書』。ヘリオポリス聖鳥フェニックスは永遠の生命のシンボル。『大エジプト展』ドイツ民主共和国ベルリン国立博物館(ボーデ博物館)蔵/東京国立博物館[ほか]編、日本テレビ放送網、1988年、212頁。

図10　楚帛画の鳥：楚帛画人物御龍図　前掲『世界美術大全集　東洋編 第２巻　秦・漢』小学館。

図11　羽人と兎：綏德王得元墓室西壁門左、右立柱畫像、中國畫像石全集編輯委員會編『中国畫像石全集５　陝西、山西漢畫像石』、山東美術出版社、2000年、56頁。

図12　地底の亀と月上の蟾蜍が銜える雲気：『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、1973年。

図13　龍と尻尾の蕚（パルメット）：『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、1973年。

図14　角が大きく成長したオオツノジカの彫刻：『スキタイとシルクロード美術展』、日本経済新聞社、1969年、竿頭飾鹿木、皮革前５－４世紀パズィルク第２號高塚（山地アルタイ）長さ65cm。

図15　角の模様とパルメットの花：前掲『図説世界文化史大系 13　北アジア・中央アジア』角川書店、1961年、72頁。

図 16　枝角の先端に咲くパルメット：同上。

図 17　馬王堆の下半身が 180 度回転して跳ね上がる鹿：前掲『長沙馬王堆一號漢墓』

図 18　湖北省の下半身が 180 度回転して跳ね上がる羊：文物 2010 年第九期表紙裏。湖北竹山県博物館収蔵的西漢金帯扣

図 19　黄金の騎士と馬：張増祺『晋寧石寨山』、雲南美術出版社、1998 年、図 31　四牛騎士貯貝器。

図 20　黄金の騎士と馬（拡大）：同上。

図 21　女神：リスティーヌ・フロン編、田辺勝美監訳『世界考古学大圖典』同朋舎、1987 年、222 頁。

図 22　騎士：同上。

図 23　座席に座るイシス：イシスの小像。青銅と木材、末期王朝時代、前 600 年以降。北サッカラ出土。高さ 23cm。Ian Shaw , Paul Nicholson, 内田杉彦訳『大英博物館 古代エジプト百科事典 』原書房、1997、61 頁。

図 24　頭上に座席を載せるイシス：ステファヌ ロッシーニ『エジプト神話シンボル事典』大修館書店、1996 年、75 頁。

図 25　アルタイのスフィンクス：『西域の秘宝を求めて』加藤九祚、時代社、1969 年、 7 頁、パジリク古墳の秘宝、第五號出土のアプリケ。

図 26　信期綉：『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、1973 年。

図 27　信期綉：同上。

図 28　信期綉：同上。

図 29　長寿綉：同上。

図 30　長寿綉：同上。

図 31　乗雲綉：同上。

図 32　乗雲綉：同上。

図 33　スフィンクス：辻尾榮市氏を介して林俊雄氏から、いただいた写真の一部。

図 34　エジプトの子供：前掲『大英博物館 古代エジプト百科事典』224 頁、若年の髪房。

図 35　羽人：南陽文物研究所編『南陽漢代画像磚』文物出版社、1990。

図 36　羽人： 陝西・山西兪林古城灘墓門右立柱畫像の羽人。中國畫像石全集編輯委員會編『中国畫像石全集 5　陝西、山西漢畫像石』、山東美術出版社、2000 年。

図 37　羽人：前漢後期、陝西省西安長安城址出土の羽人。曽布川寛・谷豊信『世界美術大全集　東洋編 2 秦・漢、小学館、1998 年、39。

図 38　羽人：湖北省荊州市天星観二号墓発掘簡報、「文物」2001、文物出版社。

図 39　スフィンクス：『天馬:シルクロードを翔ける夢の馬』奈良国立博物館、2008 年。

図 40　スフィンクス：透かし彫り飾り板。朝日新聞社文化企画局東京企画部編『大英博物館アッシリア大文明展 ：芸術と帝国』、1996、127 頁。

図 41　ライオン？の入れ墨：『スキタイとシルクロード美術展』日本経済新聞社、1969、52 刺青皮膚　怪獣文。

図 42　スキタイ文様の入れ墨：前掲『図説世界文化史大系 13　北アジア・中央アジア』、71 頁、133 死体を飾るスキタイ文様。

図 43 雲気文とパルメット：前掲『長沙馬王堆一號漢墓上冊』、図一七、黒地彩絵棺蓋板紋飾。

図 44　漆屏風：同 94 頁、漆屏風。

図 45　朱地彩絵棺飾：同折り込み図二四　朱地彩絵棺紋飾。

図 46　朱地彩絵棺蓋板紋飾：同折り込み図二二　朱地彩絵棺蓋板紋飾。

図 47　金銀象嵌金具：小田部英勝編『始皇帝と彩色兵馬俑展』TBS テレビ、2006 年、47 頁。

図 48　清、普化天尊像の龍と雲気：齋藤龍一構成・編集『道教の美術 = Taoism art』読売新聞大阪本社、大阪市立美術館、2009、88 頁　清時代、19-20 世紀。

本発表および拙稿は、平成２２年度科学研究費補助金（基盤研究）(C) (2) 雲気文などの文様に見える復活再生観念の研究にもとづく研究成果の一部である。

（大阪府立大学）